

【暮らし】

<キラリ人生>心寄り添う理想郷 看護師から介護看護施設の経営へ

2013年9月25日

千葉県松戸市の「サボテン六高台（ろっこうだい）」。ここには、全身の筋肉が衰えていく筋萎縮性側索硬化症（ALS）患者一人が入所している。自発呼吸ができなくなり、気管切開をされ、いつ人工呼吸器が必要になるか分からない。スタッフの懸命の看護が続く。

「サボテン…」は末期がんや難病患者を進んで受け入れる、サービス付き高齢者住宅（サ高住）では全国でも数少ない存在として知られる。切り盛りするのは、看護師から施設経営者へ転じた佐塚みさ子さん（52）。当地で介護関連事業を運営する株式会社「アース」の代表取締役だ。療養デイサービスでも別のALS患者を受け入れている。

「二〇〇九年に起業して最初に取り組んだのが訪問看護。その経験の中で、重度の患者さんを受け入れる施設やデイサービスがない現実を知り、がくぜんとしました。私が施設に電話で繰り返しお願いしてもダメ。病気の重さで差別されない施設を、自分たちでつくるしかない、と覚悟を決めました」

佐塚さんの両親はろうあ者。子どものころ、それを理由にいじめられた。重く、悲しい当時の体験が、今の仕事に直結している。

「どうして差別する人とされる人がいるのかしら？ 生まれたときはみんな同じ裸なのに」。心の中で「大人になったら、弱い人、貧しい人、体が動かない人を守る大きなおうちをつくらう！」という夢を温めていた。

志は高かったが、家計は厳しかった。中学卒業後は学費免除の准看護師学校へ進み、病院に就職した。しかし、日々の勤務で感じたのは、一人一人の患者にきめ細かく寄り添えない、病院医療の限界だった。

もっと深く医療や看護を学び、患者に寄り添う場を。そう思って正看護師学校の門をたたいたのは、二人の男の子の子育てが落ち着いた四十歳を過ぎてから。続いて介護専門員の資格と、大学入学資格検定（当時）を取得した。

「私はせっかちで突進タイプ」という佐塚さん。四十代後半、それまでに蓄えたお金で会社を興し、訪問看護サービスを始めてから、四年間で訪問看護やケアマネジャー事務所、サ高住の開設と事業を拡大してきた。それでもなお、「今までできなかったことが、噴水のように頭に浮かんできます」とほほ笑む。

昨年六月には、訪問看護で知り合ったALS患者の船後靖彦（ふなごやすひこ）さん（56）を取締役に迎えた。患者本位の看護と介護に役立てるためだ。船後さんは奥歯を使って打ち込むパソコンメールな



笑顔で利用者のケアをする佐塚みさ子さん＝千葉県松戸市の「サボテン六高台」で

どで、必要なアドバイスなどをスタッフに伝えている。

「将来は、訪問看護体制を敷く医療施設を創設したい。病後児を受け入れる保育園も」と佐塚さん。自分も会社も成長の途中。医療と看護の理想郷を真っすぐに目指す。

◇

入所などの問い合わせはアース＝電047（393）8934＝へ。

（加藤木信夫）

Copyright © The Chunichi Shimbun, All Rights Reserved.